アーリントン「国立墓地」の位置

――国家的顕彰と国民的和解――

原田敬一

〔抄　録〕

アーリントン国立墓地は、なぜ「国立墓地」でありえるのか。南北戦争という大惨事を経て、有名人の埋葬や顕彰碑の建立を通じて、「国家的顕彰」の輝かしい場として、アーリントン国立墓地の位置は上昇する。その一方、連邦議会や南部諸団体は「国民的和解」の象徴の要素をアーリントンに持ち込んだ。「顕彰と和解」両方の意味が「国立墓地」に込められたと見るべきである。

キーワード　国立墓地、軍用墓地、顕彰、和解、南北戦争

はじめに

戦争で亡くなった人々をどのように追悼すべきか、または国家による追悼をするべきか否か、ということについての議論が一九九〇年代に入って盛んに行われるようになった。二〇〇一年一二月には、福田康夫官房長官の主催による「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会」が設けられ、

東江康治（前名桜大学長、元琉球大学長）／今井敬（経済団体連合会会長、新日鐵（株）代表取締役会長）／上島一泰（前日本青年会議所会頭、ウエシマコーヒーフーズ（株）社長）／上坂冬子（評論家）／草柳文恵（キャスター）／坂本多加雄（学習院大学教授）／田中明彦（東大大学院教授）／西原春夫（国士舘理事長、元早稲田大学総長）／御厨貴（政策研究大学院大学教授）／山崎正和（東亜大学長、劇作家）

の一〇名を委員として、表記の検討を行った。座長は今井敬氏、座長代行は山崎正和氏だった。中途の二〇〇二年一〇月坂本委員が急逝するという事故もあったが、二〇〇二年一二月二四日には「報告書」を提出し、

本懇談会としては、二一世紀を迎えた今日、国を挙げて追悼・平和祈念を行うための国立の無宗教の恒久的施設が必要であると考えるに至った

という結論を発表した。一年にわたる間、「首相官邸」のHPで公開された「議事要旨（速報版）」を見ると、懇談会委員の間でもさまざまな意見があったし、「報告書」が発表されると、靖国神社国家護持派の一斉攻撃にさらされ、懇談会の結論は棚上げとなった。「報告書」そのものも、「構想の曖昧さは、各方面の意向の寄せ木細工のようで説得力に乏しく」「対外的な摩擦を緩和する時間稼ぎの道具になっているに過ぎない」[1]と酷評されるものだった。

ただ現在のところ、日本政府の関係機関が「追悼・平和祈念」を論議した公的発表はこれだけなので、本稿の最初に取り上げることにした。懇談会の議論の第二回には、事務方からさまざまな問題整理が行われ、「内閣官房」による「諸外国における主な戦没者追悼施設の現状について」なる説明が行われた。英国のセノタフ、ウェストミンスター寺院、ドイツのノイエ・ヴァッヘ、ボン北墓地の記念碑、フランスのパリ・凱旋門下の無名戦士の墓、イタリアのローマ・祖国の祭壇、米国のワシントンD・C・アーリントン国立墓地の無名戦士の墓、以上五カ国の現状が短く紹介されている。本稿は、アーリントン国立墓地の歴史的形成を検討することで、一律にイメージしている「戦没者追悼のあり方」を考える試みである。

このように、欧米の国民国家が行っている「戦没者追悼のあり方」が参考にされることはあっても、決してアジア各国の現状などは一顧だにされない、というのが二一世紀に入っても続いているお寒い状況である。私の調査・検討では、英国について少し検討したが[2]、それ以外の四カ国については未了となっている。本小論は、アメリカ合州国の場合の検討である。ドイツの事例は、二〇〇四年と二〇〇五年の八月に調査を行ったので、いずれ紹介し、検討を加えたい。

第一章　アーリントン墓地の設置

第一節　南北戦争と戦没者墓地の設置

（一）南北戦争と戦死者

一八六〇年のアメリカ合州国で、奴隷制度の存続をめぐって、国家的分裂が顕著に見え始めた。同年一二月二〇日サウス・カロライナ州がまず、他の州との連合を解消する条令を州議会で満場一致可決したのである。他の南部諸州五つもそれに続き、連邦離脱の六州で翌六一年二月新国家であるアメリカ連合国 the Federate States of America（いわゆる南部連合、以下南部連合と記す。最終的に一一州。）を結成し、ジェファーソン・ディヴィス Jefferson Davis を大統領に選んだ[3]。

戦争は、一八六一年四月一二日分離州であるサウス・カロライナ州のチャールストン港外にあるサムター要塞を、南軍が攻撃したことにより始まった。一三日には南軍の手に落ち、リンカーン大統領は、一五日正規の連邦軍一万六〇〇〇名に加え、七万五〇〇〇名の兵士を三ヶ月召集することや、一九日海軍による南部封鎖などの指示を行ったが、軍事的敗北を重ねるだけだった[4]。南軍も北軍も、首都（リッチモ

ンドとワシントン）への進入をめざして戦ったが、どちらも成功することはなかった。一八六三年七月一日から三日にわたったゲティスバーグの戦いは、リー将軍率いる南軍の北部進入を北軍が阻止し、その北上能力をほぼ最終的に打破した記念碑的戦場となった。[5] 現在ゲティスバーグには、国立墓地と軍事公園 Military Park が設けられ、多くの観光客で賑わっている。リンカーン大統領の有名な演説「人民の、人民による、人民の政治」は、戦争さなかの一八六三年一一月一九日に、この国立墓地で行われた追悼祭の時のもの。[6]

結局南北戦争は、同胞相争う「骨肉の戦い」となった結果、六一万八〇〇〇人（北軍三五万九五二八人、南軍約二五万八〇〇〇人）[7] という凄まじい戦死者の列は、独立戦争の四四〇〇人、第一次世界大戦の一一万五〇〇〇人、第二次世界大戦の三一万八〇〇〇人、朝鮮戦争三万三〇〇〇人、ベトナム戦争の戦死者・行方不明者あわせて五万八二〇九人とくらべて「いかに破壊的な戦争であったか」[8] と恐ろしいほどのものであった。確かに南北戦争の戦死者は、それ以外のアメリカの戦争での戦死者総数より多い。だから南北戦争の戦死者を埋葬した国立墓地は、参加した各州にあるのだが、ここではワシントンDCにあるアーリントン国立墓地のみを取り上げ検討する。

（2）アーリントン墓地の設置とリー将軍一族

アーリントン国立墓地の土地本来の所有者が、南部連合の有名な軍事指導者リー将軍であることはよく知られている。その法的な経過やリー一族の抵抗などについては、別稿を準備しなければ語り尽くせない。ここでは、南北戦争中、当主のリー将軍がバージニア州に殉じ、南軍の軍事的指導者になると、その地所が北軍の占領下に置かれ、様々な軍事的用途に使われ始めたことを確認することが必要である。以下、アーリントン墓地についての主要文献の一つである、ジェイムス・エドワード・ピーター著『アーリントン国立墓地：アメリカの英雄への社』（James Edward Peters "ARLINGTON NATIONAL CEMETERY : Shrine to America'sHeroes" Woodbine House, 1986）を参照し、まとめていく。

反乱税法案が議会を通過したのと同じ時に、別の立法がリンカーン大統領の机に届けられた。纏められた法案の中心条項は、「合州国の大統領は時宜にあっていると判断した時にはいつでも、墓地の土地を取得し、それらを国に奉仕して死んだ兵士のための国立墓地として確保させる権力を持つ」ということを規定するものであった。一八六二年七月一七日に法律の署名がなされたが、多くの連邦 Union の戦死者の埋葬をなすには不適当な準備でしかなかった。戦争の初期には、戦いの多くはワシントンをめぐって行われ、多くの傷ついた兵士たちが介護され、亡くなる病院の町が必要になった。まもなく埋葬スペースは不足するようになり、公衆は兵士の埋葬による無計画な恥ずべきマナーに反発した。この公衆の悲鳴は、墓地公認法案の可決という結果となり、リンカーン大統領は陸軍長官に、必要な国家的埋葬地を設けるよう指示した。一八六二年の間に軍用墓地 military cemetery は、アレキサンドリア、バージニアやコロンビア地区に設置されたが、一八

六四年までに戦争の連続と多くの連邦軍戦死者で、埋葬スペースは再び欠乏した。それ故に、別の醜聞を避けるために、スタントン陸軍長官は主計総監に追加の土地を調査し、彼の賛成できる提案を出すように命じた。

ミージス Meigs 将軍は調査しなかった。彼にとって、次の軍用墓地をどこに設けるべきかということは明らかだった、それはアーリントン・ハウスの土地だった。一八六四年六月一五日に、彼はアーリントンを求められた場所として提案した。彼のスタントンへの手紙では、「邸宅の周囲の土地はそのような用途に見事に適っている」と述べた。スタントンはこの選択に対するミージスの熱意を明らかに共有し、珍しい早さで回答し、ミージスに全く同じ日に次のように通知した。

アーリントン邸とその周囲の土地は、軍用墓地のために収容される。（中略）主計総監はこの命令の実行を委ねられる。彼は土地を、二〇〇エーカーを上回ることなく、この目的のために、すぐさま測量し、準備し、囲い込むべきである。

たとえアーリントンだけが付加された埋葬スペースの必要を充足させる受容力のある利用可能な位置にあったとしても、邸宅の周囲の二〇〇エーカーよりも、墓地に明らかにより適した一一〇〇エーカー程度の小区画があった。ミージスの意図がアーリントン・ハウスに非常に近い場所に兵士を埋葬することにあるのは明確だった。この報復的な目的がスタントン長官になかったとは疑わしい。というのは、彼はリーへの個人的憤慨を公表したからだ。

また軍の埋葬地としてアーリントンの場所をミージスが選んだのには第二の理由があった。歴史的な記録では、彼のスタントンへの提案に一ヶ月以上先だって、ミージスはアーリントンの土地に戦死した軍人の最初の埋葬を命じていた。六月一五日に、ミージスがスタントンに手紙を書いた時、そこには一ダース以上の兵士が既に埋葬されていた。正確には一八六四年五月一三日、ペンシルバニアの農民で、第六七ペンシルバニア歩兵隊G中隊のウィリアム・クリストマン二等兵が、アーリントン国立墓地に埋葬された最初の兵士となった。今日ではクリストマン二等兵の墓は、墓地の北境界線に近い二七区に、他の南北戦争戦死者とともにある。

アーリントン・ハウスの周囲の土地を墓地に変えるというミージスの決定の理由がどんなものであろうとも、できるだけ早く、そこに多くの人々を埋葬することが彼の目的だった。最初、邸宅に宿泊していた兵士たちは、ハウスの近くに墓を設置することに反対し、できるだけハウスから遠くに遺体を埋葬するよう命じた。しかしこれはミージス将軍の許可をえられなかった。彼が一八六四年八月に墓地を訪れた時、新しい多くの墓によってハウスには殆ど近づけないだろうと予期していた。代わりに彼は、邸宅が最初南軍に占領された時と同じ様子であることを知った。墓は、ハウスからある距離を以て適切に配置されていた。ミージスは怒り狂って、ワシントンのすぐ近くから二六人の遺体を持ってこさせ、八月中旬の暑さの中で、これらの戦没兵士の埋葬を、ハウスから

ほんの数ヤードの、リー夫人のかつて有名だったバラ園の周りにするよう指揮した。これらの墓は、もとのままの場所に今でもあり、再建された庭園を取り囲んでいるのが見える。（二五～六頁）

これがアーリントンを、国立墓地として出発させた理由である。戦争がワシントン周辺で多く戦われたため、多くの墓地が必要になり、アーリントンが確保された。ただそれを推進したミージス主計総監には、「反逆者」リー将軍という意識があり、豪壮な邸宅であるアーリントン・ハウスの周囲を墓で埋める、という思惑があった。最初は「共同墓地」として出発したということを確認することが必要である。

一八六四年アーリントンに墓地を設置したことは、南北戦争中のワシントン周辺での、悲惨な多数の命の損失によって必要であった。毎日数十の埋葬が執り行われた。戦没兵士があいついで埋葬された時、単に質素な白色塗料の木製墓板が彼らの墓を特色づけた。ほんの数年のうちに、時間と自然がこれらの板の犠牲者を連れ去り、朽ちさせた。モントゴメリー・ミージス主計総監が、一つの墓板あたり一・二三ドルの費用で継続的に取り替えるのは実用的でないことに気がつき、代わりの墓標の研究を命じた。彼は、錆び付きを防ぐために、墓標を鋳鉄製にし、亜鉛で覆うよう提案し、墓地にそのような墓標をいくつか置いた。しかし、これらの鉄製墓標は、より伝統的な石の墓標を支持する政府の役人に反対された。遂に、一八七三年合州国議会は、今日もなお使われている大理石の墓石を利用することを可決した。もとの鋳鉄製墓標がたった一つだけなお現存している。それはDaniel Keys大尉の墓の特色である（一三区、番号一三六一五、グロスG-29/30）。【写真1】（三〇七頁）

埋葬の方法も初期は、いわばその場しのぎのものであった。白ペンキで塗られた木製の墓標で示されるだけだったが、自然と朽ちていくのに対し、ミージス将軍は鉄製を提案したが、やはり伝統的な石の墓標が採用された。

南北戦争の終わりから、アーリントン・ハウスは、墓地の管理者の官舎としては勿論、墓地の管理センターとして役立てられるようになった。戦争の終わる頃には、墓地は二〇〇エーカーとなり、おおよそ一万六〇〇〇人の遺体を収容していた。一八九七年に墓地地域は倍加し、四〇八エーカーまで

【写真1】唯一残る鋳鉄製墓標

になった。一九八一年までにフォート・メイヤーFort Myerの南駐屯地the South Postとして以前知られていた土地を獲得し、六一二エーカーになった。アーリントンに埋葬された数多くの人々は、全ての戦争の後著しく増加していた。一九五七年までにほぼ九万三〇〇〇人のアメリカ軍人と家族がアーリントンに埋葬されていた。それから三〇年もたたないうちに、一九八六年までにその数は再び倍加して、二〇万人に達していた。（三七頁）

「共同墓地」として出発したアーリントンに、なぜこのように戦死者の埋葬が、急増していくのか。それには、「多くの有名なアメリカ人」の埋葬という付加的な事実が作用している。

アーリントンに休息の場を求めたいという軍人と家族の要求は、ここに埋葬されることを選んできた著しく多くの有名なアメリカ人によって高められ続けてきた。アーリントンでの埋葬というこの願いは、共同墓地以上には考えてこられなかった初期の時代とは、墓地の名声の点でドラマチックな変化を示している。もともとの埋葬は、願いではなく必要からアーリントンで行われた。ここに遺体を埋葬することを選ばない家族はほとんどいず、ますます多くの国家的英雄が、最後の休息の場所としてアーリントンを選び、彼らに仕えた多くの男女がこれらの例に従った。今日では、アーリントンでの埋葬は、連邦政府の公的な調節により制限されている。（三七頁）

（3）黒人埋葬地について

もう一度南北戦争に戻る。一八六三年までは、北軍は軍事的優勢を確保することはできなかった。奴隷制度維持を表明しながら連邦にとどまっている諸州を団結させるための政策が、奴隷解放宣言だった。[9] 一八六二年九月二二日、奴隷解放予備宣言が出されると、リンカーン大統領には、連邦の維持という当初の戦争目的に、奴隷解放という人道的目的が付加され、英仏の戦争介入阻止、議会の全面的支持などを調達し、奴隷解放を南部連合国に限ることによって、境界諸州を団結させることになった。一八六三年一月一日に奴隷解放が実施されると、三月一三日黒人志願兵の受け入れが、大統領によって許可された。これにはシャーマン将軍や他の北軍の軍人たちは皆真っ向から反対していた。黒人を白人と戦わせることなどできない、というのである。[10]

黒人だけの聯隊が組織されたが、それは差別的なものだった。給料

【写真２】黒人部隊所属を表す「U.S.C.T」が刻まれた墓標

・装備・軍事裁判で差別され、作戦でも白人部隊に先駆けて、突撃させられるというものだった。[11] それにも関わらず、黒人部隊は数多くの場面で傑出した働きをし、一八六五年までに黒人兵は北軍兵士全体の約五分の一を占めるようになった。[12] 戦争終了時までに連邦軍（北軍）に加わった黒人兵士は、約一八万六〇〇〇人（いずれも概数だが、北部自由州から五万三〇〇〇人、境界州から四万人、その他の奴隷州から九万三〇〇〇人）で、「そのうち、約三万八〇〇〇人が戦死」し、その戦死率は「白人兵にくらべ四〇％以上も高かったといわれている」。[13]

アーリントンが一八六四年に最初に設立された時、埋葬は、その時点での軍隊の組織に反映して、人種と階級によるものだった。埋葬地区は、士官と下士官兵の間で、また白人軍人と黒人軍人の間で区分された。黒人兵は、初め合州国黒人部隊United States Colored Troopsの構成員で、二三区と二七区に埋葬された。これらの地区の墓石の多くは、「U.S.C.T」という名称をつけている。黒人市民は、二七区に埋葬されている。一九四八年分離部隊廃止という米国軍隊の方針に従って、人種による埋葬区別はまたアーリントンではなくなった。

アーリントンは、身元不明や地味な経歴の兵士のための墓地として主に始まったが、南北戦争後まもなくますます多くの士官がアーリントンへの埋葬を要求し始め、墓地の威信を増大させた。アーリントンの埋葬の名誉が増すに連れて、墓地内に最も卓越した墓域を確保するために競争が進んだ。これは、事実上士官と下士官兵との分離に導いた。一九四七年に墓石に関する規則の変更と同時に、士官と下士官兵の分離の間の全ての区別は除去された。（三〇五頁）

第二章　戦没者墓地の展開

第一節　南北戦争後の変化

南北戦争後、アーリントン墓地の威信を高める要素が三つあった。第一は戦死者の象徴的埋葬である。南北戦争の戦死者のうち一万六〇〇〇人がアーリントンに埋葬されたが、戦死者埋葬はそれだけでは終わらなかったのである。戦死者の埋葬地という位置づけから、過去の戦死者までがわざわざここに持ち込まれ、再埋葬されることになった。ジェイムス・E・ピーターは、これを「全ての戦争からの兵士たち」と名づけ、次のように説明している（三〇二頁）。

【全ての戦争からの兵士たち】アーリントンに埋葬されているのは、アメリカの全戦争の歴戦の勇士たちveteransで、数ある国立墓地の中でアーリントンをユニークなものにしている事実である。アーリントンは、一八六四年まで設置されていなかったが、独立戦争the Revolutionや一八一二年の（英国との）戦争の歴戦の勇士たちveteransは、ここに再埋葬されてきた。これらの名誉ある戦死者の中には四七二五人の無名戦士がおり、かれらの殆どは南北戦争中に亡くなっている。これに加えて、アーリントン墓地に埋葬された四〇人以上の外国籍の人がいて、亡命したポ

ーランド大統領イグナス・パデレフスキーと第二次世界大戦のドイツ人捕虜アントン・ヒルベラス（15C区画、347－1区、碁盤目H－25）を含んでいる。またアーリントンは、その死が公的に確かめられたが遺体が依然として取り戻されていないrecover兵士service personnelの追悼にも捧げられている墓域である。

合州国が戦った全ての戦争の戦死者を象徴的にアーリントンに埋葬する、という意識が根底にあり、こうした措置が次々ととられるようになった。第二点は、さまざまな国家的儀式であり、その焦点は戦没者記念日である。北部諸州においては、南北戦争の戦没者記念日を五月三〇日としている。

さらにアーリントン墓地の名誉ある地位に貢献したのは、ワシントンDCに非常に近いという理由からここで行われてきたさまざまな儀式である。早くも一八六八年には、最初の「追悼の日Memorial Day」行事が行われる。復員団体「共和国大陸軍」司令官であるジョン・A・ローガン将軍は、「私たちの国を守って亡くなった仲間」を記憶するremember追悼行事のための日として五月三〇日を指定していたが、その日にアーリントンで最初の行事が行われた。当初ささやかに行われた追悼の日行事は、数千人が墓を飾るために墓地をめぐり、古代円形劇場the Old Amphitheatreで国家の最も偉大な話し手（上院議長など）の感動的な演説に耳を傾けるという、立派な終日儀式に発展した。この習慣は、今日でも数千のアメリカ人が毎年「追悼の日」にアーリントンを訪れることとして続いている。（三八頁）

お墓に献花して飾るので「Decoration Day」とも言われ、この日は一八六八年法定休日になった。北部諸州は五月三〇日に統一されているが、南部諸州では、四月二六日のアラバマ、フロリダ、ジョージア、ミシシッピ、五月一〇日の南北カロライナ、六月三日のケンタッキー、ルイジアナ、と分かれている。[14] まさに合州国である。

第三点は、さまざまな顕彰碑が建てられていったことである。各聯隊や部隊、戦争の記念碑などが次々と計画され、アーリントンに持ち込まれた。大きなものはアーリントン墓地の埋葬区画には無理で、有名な「硫黄島記念碑」は墓地外に建てられた。

第二節　国民的和解の精神と南部連合記念碑建立

（一）「南部再建」と米西戦争

アーリントン墓地は、南北戦争の北軍戦死者の墓地として出発し、しかも前述したように南部連合の指導者リー将軍の屋敷と土地を接収して設置したものだから、北部連邦とそれを継承するアメリカ合州国に偏した追悼の場としていくらかは残っているのではないか、という疑いもあり得る。現在のところ、アーリントン国立墓地について最も詳しく紹介した古川勝久氏は、

北軍ミージス将軍が自らの仇と憎む南軍リー将軍からその土地を奪い取ろうという目論見こそ、今日のアーリントン国立墓地誕生の契機であったのである。南北戦争時における南北間の血塗られた敵対心と憎しみこそが、アーリントン国立墓地の原点にある。[15]

と「南北間の血塗られた敵対心と憎しみ」を繰り返して強調している。

はたしてそうだろうか。検討してみよう。

南北戦争後の合州国の問題は、連邦再統一と戦乱で破壊された「南部再建」であった。主な戦場と化した南部は目を覆いたくなるひどい荒廃で、焼かれた家屋、荒野に帰した農地、破壊された鉄道や道路という有様で、民衆はどこでも窮乏に苦しんでいた。特にジョージア州や南北カロライナ州では破壊が徹底していて、シャーマン将軍率いる北軍が通過した所は三〇年間草木も生えないだろう、と言われたほどだった。「南部人は文字通りの廃墟の中から再建に立ち上がらなければならなかった」[16]。一八七六年大統領選挙の混乱後、いわゆる「一八七七年の妥協」が実施に移される。共和党大統領候補ヘイズの当選確認、連邦占領軍の南部撤退、南部への連邦資金の投下、南部人の閣僚採用などである[17]。こうしていわゆる「南部再建」期は終わる。

しかし、南部と北部の対立感情はそう簡単に消えなかった。例えば、アーリントン墓地には、当初から少数ではあるが、南軍兵士が埋葬されていた。ところが、戦争後の数年間は北部と南部の敵意のある感情が残ったままだったため、これらの南軍兵士の墓も北軍の墓だと見なされていた。南軍兵士の家族たちも、彼らの墓を装う許可を拒まれたり、極端な場合には墓地への入場すら拒否されるという南北対立の残存する状態が続いた。これらの対立感情は、ゆっくりと時間をかけてしか消え去らなかった。

次に、一八九八年の米西戦争がある。マッキンレイ大統領が、国民には情報閉鎖をしたまま、キューバをスペイン支配から解放するためという大義名分の下に戦争を始め、「愛他的、道義的戦争」[18]として合州国国民の支持を得、勝利する。この戦争の勃発は、"Rememmber the Mainel to hell with Spain!"（メイン号を忘れるな、スペインを地獄へ）を流布させるなど扇情的新聞 yellow paper の役割が大きかったと言うが[19]、確かに南北戦争後の合州国国民は、米西戦争に熱中した。この戦争で、多数の南部連合軍の元軍人たちが従軍を志願し、合州国の共同防衛を掲げて、いくつかの戦場で北部人と共に戦った。多くの歴史家は、北部人と南部人をついに一つにまとめたのは、米西戦争中の戦争への国民的衝動だったと信じている[20]。

米西戦争後、アメリカ植民女性国民協会 the National Society of the Colonial Dames of America は、陸軍主計総監に対し、アーリントン国立墓地に米西戦争の記念碑を据えるよう請願した。それは、南北戦争以来の戦闘で一緒に戦った、南部北部を問わず、全てのアメリカ軍人に対する最初の記念碑となるものだった。

（二七六頁）

女性協会の請願は意外に早く許可を得て、一九〇二年五月二一日米西戦争に参加した最も有名な復員軍人であるセオドア・ルーズベルト大統領により記念碑の除幕式が行われた。セオドア・ルーズベルト海軍少佐は、米西戦争で「荒馬乗り聯隊」を率いてキューバに攻め入り、劇的な戦闘で民衆の喝采を浴び、英雄となってニューヨーク州知事に転じ、政治家の道を歩んでいた[21]。

記念碑は、バレ Barre 産花崗岩で出来たコリント式円柱で、高さは約一五フィート（四・五メートル）である。円柱のてっぺんには、ブロンズの鷲が乗ったクィンシー Quincy 産花崗岩で出来た球が

ある。記念碑の台座後側にくっつけられた銘板には、スペインとの戦争で命を捧げた合州国兵士と水兵を讃える碑文がある。記念碑の後には、コンクリートの台の上に据えられた四門の大砲がある。内側の二門は戦争中にスペイン軍から捕獲された。それらは、アメリカ海軍の大砲二門の側に置かれている。（二五六頁）

これとは別に、一九一二年にメイン号のマストが、記念碑としてハバナから移された。

メイン号の乗組員の遺体は複雑な経過を辿って合州国に戻ってきた。スペインとの戦争は四ヶ月も続かなかったが、メイン号の乗組員が掘り出されて、合州国に戻ったのはまず一八九九年一二月二八日だった。ウィリアム・マッキンレイ大統領とジョージ・デウィ大将は、アーリントンの二四区で彼らの埋葬を主宰した。その後、沈没から一二年以上の間、かつての強大な軍艦のマストは、ハバナ港の水の上に浮かんで見えていた。一八九八年に艦と一緒に沈んだメイン号の乗組員の六六遺体は、なお艦内にあった。遂に、一九一〇年五月九日、議会は港の底から、「アーリントン国立墓地での遺体のふさわしい埋葬のために」、メイン号を引き揚げることを正式に許可した。加えて、議会は陸軍長官に、メイン号のマストを動かし、アーリントンに埋葬された乗組員の遺体の近くに記念碑としてふさわしい位置に建てる権限を与えた。軍艦を引き揚げるのに約二年かかり、一九一二年三月に六六人の遺体は回収され、合州国に戻された。遺体のうち一体だけは身元が確認でき、その水兵は埋葬のため故郷に戻された。こうして、一九一二年三月二三日、ウィリアム・ハワード・タフト大統領は、六五人の男たちをハバナのコロン Colon 墓地からもっと早くに掘り出された二四区の仲間たちの隣に埋葬する奉仕活動を主宰した。メイン号の爆発の犠牲者全員がアーリントンに二二九人まで埋葬され、そのうち六二人は身元判明し、一六七人がわからなかった。

ハバナ港の海底での一四年の後、メイン号に残された全ては、捻れ錆びた砲弾だった。その砲弾は、海に引っ張って行かれ、一九一二年三月一六日に、六〇〇尋（三六〇〇フィート、一〇八〇メートル）の深さの水中に、いっぱいの名誉とともに慌ただしく沈んでいった。海軍調査法廷は、メイン号の沈没を調査するために、ウィリアム・T・サンプソンが努めるよう、陪審名簿に載せた。爆発は潜水艦の機雷で起こされたという法廷の報告書は、広範囲にわたる公的な疑いを消し去りはしなかった。

メイン号沈没の一七周年である一九一五年二月一五日、米国艦船 the USS メイン号記念碑は、二二九人の乗組員が埋葬された区域のちょうど南に献呈された。記念碑の基礎は、軍艦の小塔を象徴していて、その中心はメイン号のもとのマストを掲げていて、今でも墓地の上に高くそびえている。小塔の両側の周りには、惨事で命を落とした人々の名前が刻まれている。北側では、軍艦の出入り口が小塔へと導き、艦の鐘の半分が内側のドアに熔接されている。小塔の内側は直径三〇フィート（九メートル）の地下納骨所である。（二九六～八頁）

この記念碑は、なぜか他の用途に使用されることもある。外国人の墓地としての使用であるが、国家にとっての要人という位置づけがその判断にはある。

後の話であるが、第二次世界大戦中メイン号記念碑の中の地下納骨所は、合州国と同盟した諸国指導者の遺体を一時的に埋葬するために使用された。一九四四年に、フィリッピン大統領マニュエル・クエゾン・Y・モリーナは、日本のフィリッピン占領中亡命していて、合州国で亡くなったので、この地下埋葬所に葬られた。勿論、戦争の後には遺体はフィリッピンに戻り、丁寧に埋葬された。

一九四一年には、ポーランド亡命大統領イグナス・パデルワスキーが、ニューヨーク市で亡くなり、フランクリン・ルーズベルト大統領は、彼の遺体を「ポーランドが自由になるまで」一時的に埋葬することを許可した。パデルワスキーの遺体は、一九八六年現在なお記念碑の中に埋葬されている。

（2）南部と北部の「国民的和解」

南部と北部の一体化を醸し出した米西戦争の記念碑建立運動がそのように進む一方、議会は「国民的和解」を南部戦死者の扱いにも広げるよう求めた。

（引用者注：米西戦争と）同じ国民的和解（spirit of national reconcilination）の精神から、一九〇〇年六月連邦議会は、アーリントン国立墓地のある区画を、南部連合の戦死者の埋葬のために確保することを認めた。一九〇一年の終わりまでの一年半のうちに、アレキサンドリアやバージニア、ワシントンの「兵士の家」の国立墓地に埋葬されていた南部連合軍兵士全てが、アーリントンに埋葬されていた兵士たちと合わされ、南部連合地区に再埋葬された。そこに葬られた四八二人の中には、士官四六人、下士官三五一人、妻五八人、南部の市民一五人と無名戦士一二人が含まれている。（二五一頁）

南部そのものを顕彰する要求も、南部から運動として現れた。

ついで、南部の市民を讃えるために、団体「南部連合の娘 the United Daughters of the Confederacy」（引用者注11：一八九〇年にミズーリ州で結成され、一八九四年に全国化した女性団体）が南部連合の死者のために大きな記念碑を建てるよう、政府に請願した。一九〇六年三月四日陸軍長官ウィリアム・ハワード・タフトがこの要求を聞き届けた。一九一二年一一月一二日に、二人の人物を主賓として墓石を墓地に置く儀式を行った。一人はブル・ランの第二次戦闘で両足を失ったもと陸軍伍長のウィリアム・ジェニングス・ブライヤンで、もう一人は北軍の復員軍人団体である「共和国大陸軍 The Grand Army of the Republic」（引用者注11：現在では米国最大の復員軍人団体）の最高司令官だったジェムス・A・タンナーである。

ブル・ランは、首都ワシントンの三〇マイル（約三八キロメートル）南方の地で、一八六一年七月に行われた最初の主要な会戦で、訓練不足の北軍は統制も乱れて敗北した。戦争は短期で終わると甘く考えていた人々の考えを吹き飛ばした戦いであった（山岸義夫『南北戦

争』一九〇頁）。ブライヤン伍長が重傷を負った第二次ブル・ランの戦いは一年後の八月二八、二九日に行われたが、北軍はリー将軍を相手にして、やはり惨めな敗戦を喫した（山岸一九五頁）。ロバート・E・リー南軍司令官の指揮の優秀性が広く認められるようになる戦いとなった。

起工式と同じ日の夕方、大統領になっていたウィリアム・ハワード・タフトは、米国愛国婦人会のアメリカ革命（注：独立戦争を意味する）一〇〇周年記念殿堂で開かれたレセプションで、団体「南部連合の娘」の人々に特に語りかけた。（二五一～二頁）

南北「和解」を印象づける行動を、大統領が積極的に続けていた。

アーリントン国立墓地には、事件が起きてからだいぶ時間が経過しても、なんらかの働き掛けによって、追悼碑や慰霊碑が建立されている。米西戦争の時、キューバのハバナ港で沈んだ軍艦メイン号の乗組員二六〇人の追悼碑が建てられたのは、沈没の一四年後であった。こうして、追悼や祈念が石碑などの形を取り、アーリントンに集中することによって、国民的追悼の場として重要性が認められてきた、というのが、ここアーリントン墓地の歴史である。

一九一四年は南北戦争が終わって五〇年たっているが、ようやく南部連合と北部連邦の和解を示す記念碑が建立されたのである。筆者のジェムス・エドワード・ピーターズは、続けて、

その献納で、アーリントン墓地は遂に真の国立墓地として造られたのである。（三八頁）

と意義づけている。形式的には、一八六四年に議会がアーリントンを国立墓地として承認しているが、「真の国立墓地」になったのは、この一九一四年だというのがジェィムスの意見である。五〇年前の北部対南部という対立軸を残したまま出発したアーリントン墓地の歴史の中に、南北「和解」の象徴が現れたのである。

一九一四年の「南部連合記念碑」建立の背景には、一九一一年の開戦五〇周年から戦争終結五〇年の一九一五年まで南北戦争記念式典が全国で行われたということがある。南部でも北部でもそれぞれの戦争の意味づけを確認していくという行事であったが、そこでは「南北戦争は、奴隷制南部に対する闘いではなく（黒人解放には事実として言及するものの）、その本質は、連邦を護持しそれをより強固なものにするための試練であった」[22]という強調が行われた結果、「南北「和解」のムード」が広がっていったと考えられる。この中で、一九一二年南部出身の大統領として、ウッドロー・ウィルソンが当選する。[23]

「南部連合記念碑」は、現在も墓地の最も西の中央部、「ジャクソン広場」の中心に建てられている。この解説書は、墓地全体の重要な記念碑や墓標を解説しているが、二五〇頁から二五四頁にかけて、「南部連合記念碑」がやはり記載されている。写真の解説は、

南部を象徴する女性の荘厳な彫像が、南部の亡くなった兵士たちに向かって、月桂冠の花輪を差し伸べている。南部連合兵士の墓を特色づける先のとがった墓石が、ジャクソン広場にある南部連合記念碑を取り巻いている。（二五一頁）

とあり、確かに頂上に女性像が立ち、下段には戦場を表すさまざまな彫像がレリーフとなっている。【写真3】

【写真３】「南部連合記念碑」

（3）戦争の名称

一九一四年六月に除幕式を行い、現在でもアーリントン国立墓地の一角、南部連合兵士の墓地の中に立ち続ける「南部連合記念碑」は、英語表現の場合「市民戦争 the Civil War」の名で南北戦争を示すように、国民同士の内戦であった。南北戦争は、アメリカ合州国では一般に The Civil War と呼ばれるが、南部諸州では長く The War Between the States と呼ばれていた。内戦を意味する「市民戦争」ではなく、新しい国家の設立をめぐる「諸州間戦争」の意味であろう。ここにはＵＫ（英国）の専制に対する抵抗としたアメリカ一三植民地を、南部の立場とした考え方が反映している。[24] リンカーンは第二期大統領就任演説で「切迫した内乱 the Civil War の勃発」と使っている。[25] 合州国政府は、南北戦争後記録の収集を行ったが、その刊行物は、"The War of Rebellion"（反乱戦争）一二八巻（一八八〇～一九〇一）であり、[26] リンカーン大統領が使った"The Civil War"（市民戦争）と同じように、「内戦」を意味している。

これについては、「結局、この戦争で北部が勝利し、南部が破れたから、北部の主張が通ったというべきで、南部人は現在でも決して〝シビル・ウォー〟とはいわないということに、われわれは注意を払うべきであろう。[27]」という指摘がある。戦争をどう呼ぶのかは、戦争に対する立場を自動的に示すものではあるけれど、本稿では一般的な名称として「南北戦争」を使用している。

旧南部連合地域の運動の結果ではあるが、再統一されたアメリカ合州国の連邦議会と大統領の決議で、「南北和解」を五〇年後に実現した、という明らかな歴史がある。

（4）戊辰戦争の戦死者

想起されるのは、戊辰戦争での会津戦である。戊辰戦争期の戦死者埋葬と追悼について、最も詳しい究明を続けておられる今井昭彦氏の研究[28]から、会津戦の戦後を考えてみよう。

一八六八年九月二二日会津藩の降伏の形で終わった会津戦での戦死者は、西軍（新政府軍）三〇〇名弱、東軍（旧幕府軍）三〇〇〇名と言われる。一〇月から勝者の西軍墓地建設が始まり、立派に埋葬と追悼が行われる。これに対し、西軍当局は、「朝敵・賊軍」の汚名のもとに、東軍の埋葬自身を堅く禁じたのである（今井一八四頁）。白虎隊の埋葬は、ある村の肝煎（上方の庄屋）の妻の手によって一旦埋葬

されるが、西軍の知るところとなり、一二月頃には再び掘り起こされ、野に投棄されたという。それ以外の三〇〇〇名はもっと悲惨であった。会津藩士町野主水が後に記した「明治戊辰殉難者之霊奉祀ノ由来」という文書を、現代語化したものは、

西軍は、東軍の戦死者全員に対して絶対に手を触れてはいけない、と命令した。もし、あえて手を触れる者があれば、その時は厳罰に処するとした。したがって、だれも、東軍戦死者を埋葬しようとする者はなく、死体はみな、狐や狸などの獣や、鳶や烏などの野鳥に喰われ、また、どんどん腐敗して、あまりにもひどい、見るも無惨な状態になっていった。（一八四頁）

と述べている。[29] 結局翌一八六九年春に、町野らの努力で埋葬することになったが、黙認であり、夜間にこっそりと埋葬作業を続けざるをえなかった。町野は一九二三年六月に亡くなり、葬儀が行われたが、遺言で「あの時と同じように荒筵包みの葬儀をせよ」としたため、遺族は「遺体を荒筵で包んで、引摺って」菩提寺へ運んだ。五四年後になっても町野主水の「悲憤」は消えていなかったし、遺族もそのことは理解していたわけである。それだけではない。『朝日新聞』一九九六年一一月二四日は、山口県萩市長が同年一一月二三日に福島県会津若松市長を訪れ、懇談したという記事を掲載した。両市のトップが顔合わせをしたのは初めてのこと。会津の市民団体の招きによるが、萩市長は「私人」「非公式」を強調したという。記事は次のように続ける。[30]

一致したのは、「今すぐの和解は困難」という一点だけ。「基本的にわだかまりはない」という萩市長に対し、「一つの戦争は深い傷を残す。会津と長州だけではなく、日本とアジアも同じだ」と会津若松市長。最後まで握手することはなかった。

「和解」という行為を実現することは非常に困難であることを示した一つの事件であった。白虎隊など旧幕府軍の戦死者は、戦前の国家が維持してきた靖国神社には、明確な祭神として今に至るも祀られてはいない。これで、靖国神社は日本の「和解の文化」の象徴だ（靖国神社のHPにおける小堀桂一郎氏の発言）、と強弁できるのであろうか。[31]

むすびにかえて

アーリントン国立墓地の現状や記念碑一覧などを用意していたが、紙数の関係から不可能になった。次稿で紹介したい。

〔注〕

(1)赤澤史朗『靖国神社』二四八～二四九頁（岩波書店、二〇〇五年七月）。

(2)拙稿「第一次世界大戦と大英帝国の戦争墓地―王家・国家・国民―」、一五～二九頁（佛教大学『文学部論集』第八八号、二〇〇四年三月）。

(3)ビアード著、松本重治・岸村金次郎・本間長世訳『新版アメリカ合衆国史』二六九頁（岩波書店、一九六四年）。

(4)長田豊臣「南北戦争と再統一」一〇二頁（有賀貞・大下尚一編『概説アメリカ史』有斐閣、一九七九年）

(5)オーガスト・C・ラドキ August C.Radke 著、川口博久・杉浦忠基・鈴木健・千葉則夫・千波玲子訳『アメリカン・ヒストリー入門』一〇七頁（南雲堂、一九九二年）。

(6)アメリカ学会訳編『原典アメリカ史』第四巻、七五頁（岩波書店、一九五五年）。
(7)山岸義夫『南北戦争』二〇八頁（近藤出版社、一九七二年）。
(8)長田豊臣　前掲論文八三頁。
(9)同右一〇三頁。
(10)ロバート・ペン・ワーレン Robert Penn Warren 著、田中啓史・堀真理子訳『南北戦争の遺産』六一頁（本の友社、一九九七年）。
(11)ロデリック・ナッシュ Roderick Nash 著、足立康訳『人物アメリカ史』上、二六三頁（新潮社、一九八九年）
(12)同右二六一頁。
(13)山本幹雄『リンカーン―風化の像―』二八二頁（世界思想社、一九八四年）。
(14)藤井基精『アメリカ歴史探検三六五日』一四一～二頁（ジャパン・タイムズ社、一九九三年）。
(15)古川勝久「靖国とアーリントン、ここが違う」一〇二頁（『諸君』二〇〇〇年九月号、文芸春秋社）。
(16)山岸義夫前掲書二二九頁。
(17)井手義光「総論」二三頁（井手義光・本間長世・大橋健三郎編『アメリカの南部』研究社、一九七三年）。
(18)ビアード前掲書三四〇頁。
(19)高木八尺「近代アメリカ史」一四九頁（『高木八尺著作集』第二巻、東大出版会、一九七一年）。
(20)前掲 james Edward Peters 書二五一頁。
(21)野村達朗『フロンティアと摩天楼』一六七～八頁（講談社、一九八九年）。
(22)大森一輝「『国民の創生』という物語―二〇世紀初頭のアメリカ合衆国における南北戦争の記憶と『和解』―」一二七頁（都留文科大学比較文化学科編『記憶の比較文化論―戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』柏書房、二〇〇三年二月）。
(23)井出義光　前掲「総論」二八頁。
(24)Bell/Irvin.Wiley 著、三浦進訳『南北戦争の歴史』一二七頁（南雲堂、一九七六年）。
(25)アメリカ学会編訳前掲書、九一頁。
(26).Wiley 前掲書、一三〇頁。
(27)中屋健一『明解アメリカ史』一一二頁（三省堂、一九八七年）。
(28)今井昭彦氏の会津戦戦死者に関する論文は、次の四本である。本文で依拠し、引用したのはd論文。
a「越後小出戊辰戦役における戦死者祭祀」『常民文化』第二〇号（成城大学常民文化研究会、一九七七年）。
b「会津少年白虎隊士の殉難とその埋葬」（『常民文化』第二四号、二〇〇一年）。
c「幕末における会津藩士の殉難とその埋葬―会津戦争を事例として―」、『人類にとって戦いとは』5、所収イデオロギーの文化装置（東洋書林、二〇〇二年）。
d「国家が祀らなかった戦死者―白虎隊士の事例から―」国際宗教研究所編『新しい追悼施設は必要か』所収（ぺりかん社、二〇〇四年）。
(29)今井d論文。
(30)同一九二頁。
(31)一九六五年七月一三日、靖国神社境内に「鎮霊社」という小祠が創建された。これに祀られているのは二座で、ペリー来航の一八五三年から一九六二年までの「幾多の戦争・事変に起因」しながら「靖国神社に祀られざる諸命の御霊」と、「幾多の戦争・事変に関係せる死没に諸外国人の御霊」である。これで例えば、「逆賊」であった西郷隆盛らも祀られていると釈明したいのだろうが、靖国神社は創建以来、祭神を個別に明確化しながら祀ってきたという歴史があり、それは神道の論理でもある。それを無視して、祭神名も不明な祀り方は、靖国神社の伝統から大きく逸脱することになる。だから、靖国神社のHPを見ると、境内図の説明中に「5鎮霊社」があり、上記の「御霊」二座の説明はあるが、それが本殿の祭神とどういう関係があるのか、まったく説明されていない。靖国神社国家護持支持派の秦郁彦氏は、こ

の鎮霊社の意味は「A級戦犯の「怨霊」の落ちつき先」（『現代史の対決』二七〇頁、文芸春秋社、二〇〇三年二月）と指摘している。

〔付記〕

小論は、二〇〇二年七月二八日（日）から八月一〇日にかけて行った「第一回アメリカ合州国調査」の報告である。写真も筆者が撮影した。同行したのは、白石真生（研究協力者）・白石玲子（補助者）である。これは、文部科学省科学研究補助金（基盤研究（C）（2）、課題番号13610402、「帝国における戦没者追悼の比較史的研究－イギリスと日本の軍用墓地を中心に－」、二〇〇一～二〇〇三年度交付）による調査報告の一つである。「第一回」と銘打ったのは、調査の【主目的】として、①合州国の軍用墓地の実態調査、②合州国の軍隊の実態調査（アナポリスの海軍兵学校など）、③それらに関する公文書（National Archives）・図書（議会図書館）の調査、などを考えていたのだが、二週間での調査におさまるような分量ではなく、次回を期待してのものだったが、その後調査を継続できていない。今後も努力を続けたい。

また注(28)で引用した今井昭彦氏は、これらの諸論文を含めた学位請求論文を『近代日本と戦死者祭祀』（東洋書林、二〇〇五年一二月）として刊行されたことを付記しておく。

（はらだ　けいいち　人文学科）

二〇〇五年十月十九日受理